

ことしの早春、牛深から河浦方面にかけて小旅行をした。ある朝、牛深市役所付近からバスに乗って魚貫の方へ向かう途中、質素な服装ながら屈強そうな老人が乗り込んできた。お義理にも快適だとは言いがたいバスであったが、彼は私の隣に腰をおろす時、ドンと私にぶつかった。そして

「ああ、こりやどうも、すんまっせんじゃったなあ」

と詫言を言っ頭を下げた。わずかこれだけのことが私には嬉しかった。自分の動作が他人に迷惑をかけたのだと気付いたとき、その相手に挨拶をするのは当然のことだけれども、最近ではめったにこういう挨拶を受けることがない。たとえ毎朝の通勤バスを待っているとき、一番おくれてやってくるくせに、早くから待っていた人を押しつけるようにして、さつと乗り込み、平然と席に着いて笑っている若い女性を私は見おぼえている。それが毎朝なので、とうとう嫌気がさし、一ツ手前の停留所から乗ることにしてしまっした。

腰かけた途端にドンと人にぶつつかっても平気、人の足を踏んでも平気、人の前をまたぐようにして通っても平気、何らの挨拶をするということもない人々が何と多いことであろうか。これらの人々は、他人に迷惑をかけたり、非礼を働いたりすることが現代人の常識とも思っているのだろうか。

さきほどの牛深の老人は私より先に下



挨拶をするところ

宮川 久子

車したが、その際も「では、ごめんなせ」と声を掛けて降りていった。それにそれに対してはこちらからも「お氣をつけて」と言いたくなる。老人はそれほど学問をしたという感じの人ではなかったが、ちゃんと礼節を身につけている点で文化的な生活者だといえるのである。

最近、私は短い海外旅行を終えて帰ったところであるが、泊りを重ねた旅先の

いたるところで、このような挨拶が交わされるのを眺め、自分自身も体験した。私の見たところでは、このような挨拶は老幼男女あらゆる階層にわたって一般の常識となっている。朝、ホテルの階段ですれ違う他室のメイドさんでも微笑をたたえて「お早うございます。ごきげんいかがですか」という。夜、廊下で行きあう見知らぬ泊り客でも「今夜は」と声をかけ合う。ドアを押しても自分の後から

誰かが続いていると感じたなら、相手は近づくまでドアを押してしてくれる。鼻先でピシヤリというふうな風景は見ようにも見当たらない。

町で大きな荷物を下げた人が、あやまってそれを、こちらにぶっつけでもしたら非常に憂わしげな表情で「失礼をして済みませんでした。大丈夫ですか」と問いかける。すべて当然のことだけれども、快適である。熊本の上通りや下通り

で行き合って人の鼻先に突き当りそうになっても自分の方からは道をあけようとせず、逆に睨みつけるようにして、「お前は邪魔だ」という目付きをする高校生などと全く違うのである。日常の生活においてさえ自分の主張や行動と同一でないものは、すべて敵だといわんばかりのトゲトゲしい表情や言葉や行動は見受けられない。

「あなたが人からしてもらいたいと望むことは、あなた自身も人にしてあげなさい」

という聖書のなかのイエスの言葉が毎日の生活に生きているのである。

幾度も外国に行った私の友人は「外国でくらししていると心が落ち着く」という。つねに不愉快な思いを耐え忍んだり、神経をさかなでされるような横柄な態度を見ないですむからだというのである。

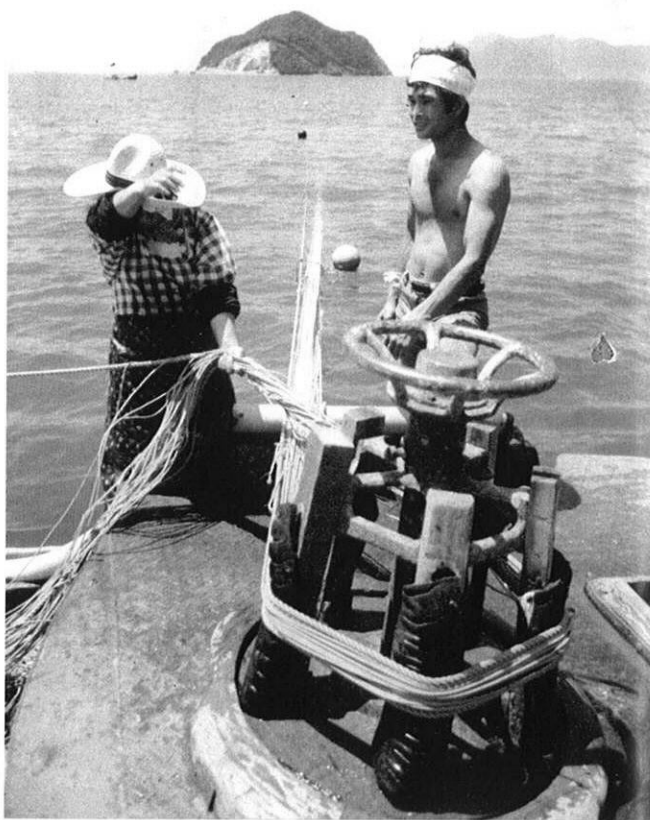
本来、優秀で勤勉な日本人が、とくに若い人々が世界を舞台として活躍する機会は次第に多くなる。その場合、相手によい感情をもたせるささやかな挨拶の習慣は、当人にとってかならず強力な味方となってくれるはずである。(歌人)

注・筆者は五月末日から三週間にわたって教育事情視察のためヨーロッパ諸国を訪問した。

えび養殖に注ぐ情熱

天草郡竜ヶ岳町極島

桑原 一生 君



「ぬっかですな、どうも」船曳綱をたぐっている人の中から、明かい顔が笑いかけてきた。赤銅色のたくましい胸に汗が光っていた。

桑原一生(かずなり)君(二二) 四十年天草農校卒。卒業後、東京の築地市場に勤めたことがある。ここで、車えびの魅力にとりつかれたという。東京では、車えびは貴重品扱だった。

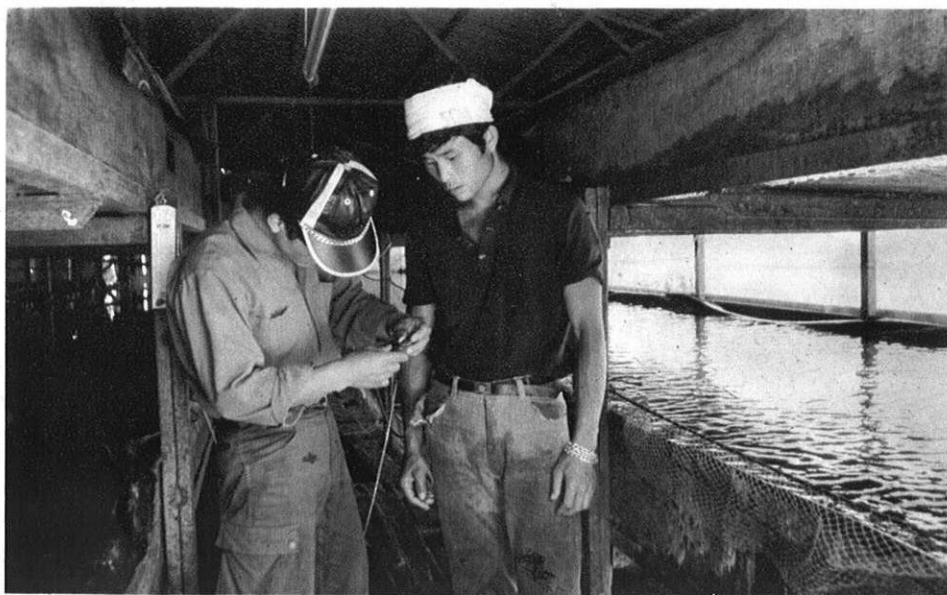
極島(ひのしま)へ帰った彼は、去年から車えびの養殖、それも、現在行なわれている海中での養殖、いわゆる築堤式養殖ではなく、陸上に水槽を設けて養殖する多段式養殖という新しい方法にとり組んでいる。一面が五十平方メートルの水槽を段状に三つ重ねたセットが三基。去年、県種苗センターから四万尾の稚えびを入れた。しかし、三万尾は死んだ。多段式は、管理がしやすい、水や砂を新鮮に保てる、観察も容易など利

点が多い。反面、えびの活動が十分でなく成長にぶい。十月以降の保温をどうするかなど問題も多い。

ことしも、また四万尾を入れた。いまのところ成長はよいようだ。機械いじりが趣味、動物は好かんです。という彼も、水槽をのそき、えびの成長を確める時の目は輝いている。普及員を通じて、あるいは、直接種苗センターと連絡をとって、技術面の研究に余念がない。

多角経営の彼は多忙である。家族の中にあって果樹園経営に、漁業にと忙しい。その暇をぬって、毎週木曜日の青年団の集りで、社交ダンスや卓球など、童心に帰って遊ぶのが、楽しいと彼はいう。

万一、ことし、そして来年と、養殖に失敗したら、と聞くと、またやりますよ。成功するまではね。と彼は根性をむき出しに答えた。



上・この広い海こそわか職場：作業のあとの玉のような汗も潮風に心地よい

下・県の水産指導員がよいちよいち寄ってはアドハイスしてくれる。この稚エビ、なかなか順調のこたるナ